

クラスニヤール村における太陽光発電の導入 -持続的な資金調達手法の提案-

雄大なタイガとビキン川に囲まれたクラスニヤール村では現在、すべての電力を村唯一の企業であるビキンが所有するディーゼル発電機に依存している。近年の燃料価格の高騰と電力需要の増加、政府からの補助金の支払いの遅れなどから、将来的には化石燃料や補助金に依存しない発電が望まれるものの、その実現のための資金調達が村としての大きな困難となっている。

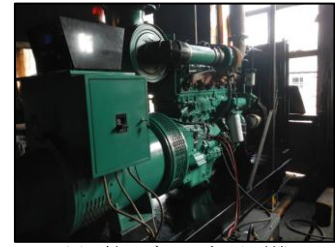


図 村のディーゼル発電機

一方、我々が実施した意識調査アンケートの結果、村人の多くが、当初我々が多くの支持を得ると予想していたマイクロ水力発電や風力発電、その他の発電方法と比べて太陽光発電を望んでいることが分かった。既存の家屋の屋根で行う太陽光発電は、小水力発電や風力発電に比べて環境への影響が小さいということから、この結果は村人の環境保全志向を反映したものと解釈できる。

このような村人の希望に沿ったかたちでの電力事情の改善に向け、我々は新たな資金調達手段として「**タイガの森ソーラー基金**」の設立を提案する。この基金は、企業からの出資金を村での太陽光発電設備導入の資金として運用することを目的とする。ただし、出資者への配当は無く、代わりに CSR(Corporate Social Responsibility) 活動の機会を出資企業に提供することを売りに出資を募る。つまり、企業は CSR 活動の一環として基金に出資することで、その効果(タイガやビキン川の保全効果、少数民族存続への貢献)や活動記録を CSR 報告書の一部とすることができる。さらに、運用段階において基金が太陽光パネルの設置やメンテナンスなどの業務をビキンへ発注することで、新規雇用を生む効果を合わせて持っている。発電された電力に対してはこれまでと同様にビキンに対して利用料金を支払い、その収入を新たな投資やメンテナンスに充てることで、投資後の持続可能性を考慮した事業モデルとしている。本企画は、クラスニヤール村と出資企業が WIN-WIN の関係になるようなシステムを構築するものであり、資金調達の観点からも持続可能な手法と言えるだろう。



図 村の気象観測所太陽光パネル



図 企画概念図

感想 今回の実習のさまざまな体験を通して、ロシアの人の自然に対する思いを感じることができました。タイガの森は、何度も開発の危機にさらされ、そのたびに、クラスニヤール村の人々は、戦ってきました。「森があるから自分たちも存在する。」森とともに生きてきた人々の言葉や行動は、心を打つものでした。

ホームステイ先で、お父さんが、お母さんのお誕生日を祝うために、シカをとってきました。娘が大きなシカをさばき、お母さんが調理します。その間、佐藤さんはお肉を切り、阿部さんは小さい子どもたちの子守りをしていました。お祝いの席には、村の校長先生をはじめ、近所から幾人も集まりました。他のお料理と一緒に並べられたシカの肉。みんなのお腹に入り、吸収され、血となり、肉となり、私たちの体の一部になりました。そのとき、自分もタイガの森とともに生きていくことを感じ、嬉しく思いました。

ある朝、食べ終えた魚を片付けるとき、お母さんから「もっと食べられるのよ。ここも。ここも。食べないの?」のようなことを見ぶり手振りでも伝えられました。タイガの森における持続可能な社会。それは、森とその生き物の存在を感じ、大切に思いながら、ともに歩いていく社会だと思いました。